

アフガニスタン人ジャーナリスト 緊急来日

～アフガンの今を知る大阪学習会～



サバウン・イブラヒーム・アルコザイの経歴

1988年3月20日生まれ 22歳
カブール市で生まれ育つ。タリバン支配下のアフガニスタンで亡命せずにコンピュータ技術を学ぶ。
911事件が発生し、アフガン戦争が勃発。タリバン政権崩壊後、世界からやってくるジャーナリストの通訳として活躍。アフガニスタンの真実を伝える仕事が重要だと感じたので、彼自身もジャーナリストに転身。
その後ウォールストリートジャーナル、共同通信などの現地特派員として活躍。
現在はフリーランスのジャーナリストである。

カブールのパルワンセ避難民キャンプで

2010年

12月9日(木)午後 6:30～
エル大阪 南館 10F 102号室

主催：イラクの子どもを救う会／イラクの子どもを救援する大阪市民基金 協賛：市民社会フォーラム
連絡先：イラクの子どもを救う会 電話 06-4864-1828

サバウーン(本名モハンマド・イブラヒム・アルコザイ)にインタビューしました。(10月15日カブールにて)

—生まれ育ったのは？

1988年にカブールで生まれて、ずっとカブールで育ちました。大学でコンピューターを学んでいたのですが、911事件後にアメリカがアフガンで戦争を始めました。私は米軍がこの国で行っている犯罪行為を、世界に告発したかったので、ジャーナリズムを学ぶコースに切り替えました。

—911事件で、人生が大きく変わったのですね。

そうです。昨年まで国連の選挙監視団で働きました。その時、私の英語が気に入られて、候補者全員のインタビューを取りました。カルザイ大統領にもインタビューしましたよ。

選挙終了後、ニューヨークタイムズやウォールストリートジャーナル、日本の共同通信社などで、現地特派員として働き、現在はフリーランスのジャーナリストとして戦争犯罪を告発しています。

—今回私と一緒に仕事をして感じたことは？

とても誇りに思いました。避難民キャンプに食料を配ったり、インディラガンジー子ども病院に薬を届けたり。両足を失った母親と介護する娘の取材なども。

今まで私は、ジャーナリストとして戦争被害者の取材を行ってきましたが、常に私の心は泣き叫んでいました。私にはお金がなかったので、写真を撮るだけで、援助することができなかったのです。

今回初めて、日本のみなさんの支援金で、貧しい人々を救うことができました。

とても感謝しています。今後も、私が日本とアフガンの架け橋となれればうれしいです。

—米軍がこの国をめちゃくちゃにしておいて、そして撤退しようとしています。これについてはどう思いますか？

米軍が撤退すれば、この国はまた内戦になってしまう可能性が高いのです。アフガン軍ではタリバンを押し返すことは無理でしょう。しかし米軍は「タリバン掃討」と言いながら、多くの無実の農民を殺し続けています。そしてニュータリバンが現れ、戦争が泥沼化しています。

私は米軍に政策の方針転換を求めます。すなわち、農民を空爆するのではなく、食料や医薬品を支援するのです。この方針転換がなければ、戦争が続きます。

—それは、まさに私たちが求めていることです。日本の憲法には第9条があって、私たちは軍隊を持たず、戦争をしないと決めました。これについてはどう思いますか？

それは素晴らしい考え方です。銃では平和を実現できません。「口とペン」、つまり話し合うことと、それをニュースで伝えること。日本の9条こそ、アフガンに必要です。

—最後に、日本のみなさんにメッセージを

もし私が来日できたら長崎はもちろん、広島や沖縄にも行ってみたいです。多くの人々と交流して、私の来日が、アフガン戦争を終わらせるために役立てばうれしいです。

〈会場案内〉

エル大阪(大阪府立労働センター)

大阪市中央区北浜東 3-14

- 京阪・地下鉄谷町線「天満橋駅」より西へ 300m
 - 京阪・地下鉄堺筋線「北浜駅」より東へ 500m
 - 地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」より東へ 1,200m
 - JR 東西線「大阪天満宮駅」より南へ 850m
 - 車でお越しの場合は、阪神高速東大阪線、法円坂出口を左折して直進、京阪東口交差点左折、西へ信号 5 つ目
- ※駐車場有り 有料

